

種文学賞 令和六年第三回目 作品集

令和六年第三回目の種文学賞は、

・小学三～六年生の部「蛇足ものがたり」

・中学高校生の部「『赤穂事件』と『学問のすゝめ』」

というお題で作品をつのり、最終的に全八名による力作がそろいました。

ここですべての作品を発表するとともに、今回の受賞者を発表します。

(受賞者の発表はこの作品集のおわりの方にあります)

目次

〈小学三～六年生の部〉		
(作者)	えりんぎ先生	……四ページ
	しょうぎマン	……五ページ
	スペシャルミニアキヤット	……六ページ
	Wくん	……七ページ
	T	……八ページ
	ゆっぴん	……九ページ
〈中学～高校生の部〉		
	キウイフルーツ	……十一ページ
	ドイル	……十二ページ
受賞者発表		……十四ページ
講評		……十五ページ

◆ ◆ 小学三〜六年生の部 ◆ ◆

\*\*\*

この部の「蛇足だまぐものがたり」は、「蛇足」という故事成語こじせいご（お

もに中国の昔話昔話がもとになってできた言葉）のあてはまる

物語ものがたりを考えると、だいお題だいでした。

蛇へびの絵をかく競争きょうそうをしていた人たちのうち、まっ先にかき

あげた人が自分の絵に足をかき足あししてしまつて、けっきよく負

けてしまつたという話から、「へびの足」を意味する「蛇足」が

へするひつようないよけいなことゝをあらわす言葉となりま

した。みなさんは、どんな「蛇足」の物語を考えてくれたでし

ようか。どうぞお楽しみください。

ピノキオ長男

えりんぎ先生（小四）

あるところに、兄弟3人とお母さんがいました。その親子はドライ

ブをしていました。ドライブをしている途中ちゆうちゆうに兄弟3人のどがかわ

いてサービシエリアに車をとめて水を買かうことにしました。しかしお

母さんのさいふに180円しかなかったので、じゃんけんをして決

めることにしました。なんと長男がじゃんけんじゃんけんをするをして勝ちまし

た。みんな気づいていなかったので長男が

「実は実はするをしてたんだあゝ」

と、あおるよあおるように言いいました。するとお母さんが長男の勝ちとつたコ

カ・コーラゼロをとりあげてお母さんと兄弟でのみほしてしまいまし

た。

「こんどからうそをつかない……」

と、長男は反省文を書きました。  
はんせいぶん

\*\*\*

## お母さんのケーキとシエフのケーキ

しょうぎマン(小三)

「ようし、ケーキを作ろうか。」

クリスマスイブの朝、ケンタのお母さんはクリスマスケーキを作っていた。スポンジをやっていたその時、

「おはよう。」

と、あくびしながらケンタは起きてきた。スポンジをやいているところを見たケンタは目を丸くして

「もしかしてケーキなの？」

「そ、そうよ。」

と、お母さんは答えた。

それから一時間後、ケーキができ、れいぞうこに置いておいた。

そして夕方、お母さんはクリスマスの夕食ができてないと大あわ

て。けれど、お父さんが、

「実はレストラン予約してたんだ。」  
よやく

と言って、レストランに案内してくれた。そのレストランのシエフはう  
てまえがよく、運ばれる物すべてがおいしかった。しかし、最後に

「クリスマスケーキでございます。」

と言って、シエフはケーキを持ってきたのだ。

ケンタとお母さんはそれを見て目を白黒させ、

「家にあるケーキはどうするー！」

とさげんだ。

けつきよくお母さんの作ったケーキは食べられなかったので、はす向かいの友だちにあげた。

\*\*\*

## 動物の国のレース

スペシャルミリアキヤット(小三)

今日は、動物の国にある学校のグラウンドでリレーをやるそうです。

走るのは、ライオンとミリアキヤットと狼おおかみです。ミリアキヤットが

「よろしくおねがいます。」

とニひきともに言いました。そして、ライオンと狼が

「よろしくね！」

とミリアキヤットに言いました。そろそろレースが始まります。ミリア

キヤットと狼とライオンが、スタート地点に立ちました。けれど、足に

余裕よゆうを持っていた狼はスタート地点から少し下がりました。それに

気付いたミリアキヤットとライオンが、

「前に行って！」

と言いましたが、狼は言うことを聞きませんでした。そしてついにレ

ースが始まりました。ミリアキヤットと狼とライオンが走りだしまし

た。狼がニひきともをぬかしていきます。狼がゴール地点にちかづい

ています。けれど、狼は自分が絶対絶対に勝つと思ったのか、走るのを止め

てコースを後もどりました。それに気付いたミリアキヤットとライ

オンは狼をぬかせると思って今走っているスピードより、ちょっとだけ

スピードを上げました。狼はそれに気付いてスピードを上げようと

しましたが、体力が無かったのでスピードを上げられませんでした。

それでミリアキヤットとライオンが

「よっしゃ！狼をぬかしたぞ！」

と言ってうれしそうな顔をしてハイタッチをしました。狼はくやしそうな顔をしていました。それを見たミリアキャットとライオンは狼のところまで行き、いっしょに走ってゴール地点でいっしょにゴールしました。観客席で見ていたお客さんの歓声かんせいがひびきました。そして狼が

「みんなありがとう！」

とライオンとミリアキャットに言いました。そして今回のレースは一位が3人になりました。

\*\*\*

鬼ごっこ

Wくん(小三)

ある日、小学一年生の、足の速い鬼わにごっこが好きな子が三時間目の体育の授業で、クラスみんなと鬼ごっこをしていました。

その子は、とんでもない足の速さでクラスの半分じゆうぶんい上の子をつかまえました。そしてのこったのはあと一人。かくれるのが上手な女の子でした。足の速い男の子は、女の子をすべり台の下で見つけました。「見つけた！」

男の子はうれしくなりました。その女の子は、足がおそいので、男の子は、女の子をすぐにつかまえました。

「何回でもタッチできるよ。」

そう言って男の子は、もう一回タッチしてしまいました。

するとそのとき

「終わり」

と、先生が終わりの合図を出しました。

「最後まで逃げきれた人」

「はい」

かくれるのがとくいな女の子は立っていました。だから、足の速い男の子が、女の子に

「ウソつくな」

と言いました。その声は先生に聞こえていました。先生は、

「鬼にふれても、アウトだよ。」

と、男の子に言いました。つまり、タッチした相手にもう一度ふれてしまったから、その男の子が、鬼になったのです。

男の子は

「うわ、やらかした」

と言いました。

「ほらね。」

と、男の子は女の子に言われて、ちょうどその時、授業が終わりま  
た。

\*\*\*

### バスケットボール

丁(小三)

バスケットのしあい日がありました。このしあいは全国のし  
あいです。いろいろなチームがあります。あきとのチームは一回目は  
一〇〇対三〇で勝ちました。そのあと一しあい分時間が空くから、ア  
ップしました。二しあい目を勝ったら決勝戦にいけます。しあいのけっ  
かは一一五対三〇で勝ちました。つぎは決勝です。決勝は相手も強  
いチームです。ふつうのしあいは五分だけれど、決勝せんになると六  
分になります。決勝せんがいよいよ始まりました。五人がベンチから

出てきました。キャプテンはあきとで、第一クォーターのメンバーは四番、七番、九番、十番、十一番です。第一クォーターは三二対三三で負けていました。二クォーター目は五番、六番、八番、十一番、十二番が出ました。第二クォーターは五三対五十で勝っています。三クォーター目は四番、五番、六番、七番、八番がでています。七五対七九で負けています。四クォーター目はさつきとおなじメンバーです。残り十秒で九七対一〇〇でまけています。けれどあきとがスリーポイントを決めて同点になりました。決勝せんでさつきと同じ人が出ます。のこり三分のところで一五三対一四九でまけています。でもあきとがずっとシュートを決めるから二点差まで追いつきました。そのあとあきとがスリーポイント入れました。しかも、そのときおされたのでファールとなり、それでえられたフリースローが入ったので勝ちました。相手チームは全体せきにんで「ファールをしなかったらよか

た」とみんながいつています。あきとのチームはめちやくちやよろこんでいました。あきとのチームはトロフィーをもらいました。

\*\*\*

## 大しよう軍の戦いく

ゆっぴん(小六)

時は戦国時代せんごくじだい、その時代でもっとも戦いくが得意な二人がいました。その二人は大奇藤村だいきふじむらと法権幸政ほうけんゆきまさという者でした。その二人はあと一歩で天下一に近づけるところまできていました。そして大奇と法権は戦を始めることにしました。大奇軍十七万、法権軍十八万の大戦が始まりました。一日目は、大奇軍が風下かぜしもにいたため法権軍に大きく有利になりました。しかし、大奇軍も必死ひっしに抵抗たいこうしました。一日



目が終わり、じようきようは、大奇軍十万、法権軍十四万と、四万の差をつけられてしまい、大奇軍の兵はあきらめた顔をしていました。しかし、大奇は

「あきらめてはいけませんよ。ココココ。」

と笑い、お酒を少し飲みました。一方、法権軍はゆかいにえんかいをしていました。そして二日目、法権軍は大奇を攻めるのをまっています。しかし、意外な展開がおこりました。一日目は北に攻めていた大奇軍が、こんどは西から攻めてきました。しかし、法権のすばやい察知力で兵を西側に展開し、敵をむかえました。どちらも一歩もゆずれない戦になり、大奇と法権が動きました。ほこをふりまわしながら進む大奇と法権。二人のい力で馬はたおれてしまいました。二人は馬を飛びおりました。どちらも一歩もゆずれないなか、兵たちはポカーンと見守っていました。すると、大奇の顔に傷がついてしまい、

法権がそのすきにこうげきしようとしたが、クラツとなってしまい、大奇はそのすきを見のがさず、ほこの柄を思いきり法権にぶつけました。法権がクラツとなった原因は、一日目の夜、酒を飲みすぎてしまい、その酒の効果がでてしまいました。大奇は、「命がほしいならわたしに天下をわたすか、お前のくびがぶっ飛ぶかどちらがいい。」と聞き、法権は仕方なく大奇に天下をゆずりました。そして大奇は天下を取りました。法権は、大奇の副長として働くことになり、大奇は、法権を見ながら「ココココ」と笑っているのです。

## ◆ ◆ 中学生と高校生のお題 ◆ ◆

\*\*\*\*\*

### 筆者 キウイフルーツ(中二)

中学生と高校生向けのお題は、『赤穂事件』と『学問のすゝめ』。「忠臣蔵」としてよく知られている赤穂事件について考える、意見文の取り組みでした。明治初めに福沢諭吉が書いた『学問のすゝめ』にある赤穂浪士批判を読みつつ、赤穂事件についての意見を述べてもらいました。難易度の高い取り組みでしたので、提出できた人自体が多くありませんでしたが、あきらめずに取り組んでくれた強者が、それぞれ立派な文章を出してくれました。その力作をぜひお読みください。

私は徳川綱吉が下した制裁には全面的に非があったと感じている。独裁は本当に怖い。それまで守られてきた社会の秩序、規範などをトップの一意により全てかき消すことが可能だからだ。浅野が吉良を斬った日、法である喧嘩両成敗制が適用されず、浅野だけが「残酷」な処刑に至った。私が「残酷」と強調したのは、彼の死に方が武士として、最も屈辱的なものであったからだ。というのも、彼は大藩の藩主であり、武士の中でも相当な身分であったはずだ。そのような身分の人が自分の選んだ刀でなく、また庶民の服を着させられて処刑されたのだ。また即日お家断絶がなされた。このような制裁は切腹においては通常ありえない。現代においても権威のある人によって

ジャッジが変わることはない。人は平等であるからだ。綱吉の制裁に

\*\*\*\*\*

はこの平等という言葉が完全に欠けている。両者の話を聞き、当時の

筆者 ドイル(中二)

状況を把握した上で、法に基づき公平な裁きをするべきであったと

思う。私はまた、この裁きが朝廷に対する権力の見せつけでもあった

私は赤穂事件と『学問のすゝめ』を読み、相手のことをいくら恨ん

と思う。いずれにせよ、法が機能せず、元首の思うように事態を変え

でいたとしても決して相手を傷つけるようなことをしないように全

ることができたのは、独裁政治の一種だ。現代においても、独裁体制

ての人が平等な世界(と全ての人を平等に裁くことのできる法律)

である国は存在する。しかし先日、そのうちのある一国が崩壊した。

が必要だと考えた。

私はこのニュースを知り、独裁は長く続けられないと実感した。必ず

浅野は吉良を斬りつけたことで切腹を命じられ、命を絶った。だ

終わりが来る。独裁は、自縛自縛の行為であるようにも思える。

がそれを命じた当時の將軍徳川綱吉は自身の母親のために行う大

切な儀式の日に事件を起こされたため激怒し、浅野の切腹を命じ

た。これは綱吉自身の感傷的な理由で裁かれており、正しい法では

裁かれていない。『学問のすゝめ』にある「内匠頭へ切腹を申し付け、

上野介へは刑を加えず、この一条を不正なる裁判と言っべし。」のと

おり浅野が吉良を斬りつけた動機を考えていない不平等な裁きだ。こうなってしまったのは、事件を裁いた綱吉が高い身分にあり、綱吉の言ったことが絶対という他の人々の意見が通らない不平等な場であつたからだ。もし事件が起こったときは正しい法で裁き全ての人々を平等に考えることができれば、その後浅野家に仕えていた武士達が落ちぶれることも、赤穂藩士の中の四十七人の武士が主君の浅野の屈辱を晴らしに吉良への討ち入りをするこもなかつただろう。

どの時代でも人への恨みをもつ人が事件を起こすことはあるが、全ての人々を平等に考え、平等に裁くことのできる法律があればまた他の人が恨みを持ち被害が広がっていくこともない。

◆ ◆  
受賞者発表  
◆ ◆

じゅしょうしゃはっぴょう

【佳作】

ゆっぴん（小学三～六年生の部）

キウイフルーツ（中学～高校生の部）

ドイル（中学～高校生の部）

今回は、小学三～六年生の部から三作品、中学～高校生の部から二作品が佳作対象となりました。そしてその五作品のな

かですぐれている二作品を優秀作品対象とし、さらにそのな

かの一作品を大賞として選出しました。

【優秀作品】

Wくん（小学三～六年生の部）

【大賞】

しょうぎマン（小学三～六年生の部）

◆ ◆ 講評 ◆ ◆  
こうひょう

小学三年生から六年生には物語をつくるチャレンジをしてもらい、それぞれおもしろみがたくさんある作品がそろいました。今回は「蛇足」という故事成語をみなさんに理解してもらおうという目的もあり、この言葉の内容に正しくそった物語をつくることをがんばってもらいました。人によっては「うーん、その物語だと『蛇足』の話にならないなあ」と私に言われて、何度も作り直しをしなければならなくなった人もいましたね。そんな中で、みなさん本当によくがんばってくれたと思います。また、もうひとつがんばってもらったのが、会話文もゆたかに入れて、生き生きとした物語をつくるということでした。その点で、大賞の「しょうぎマン」と、優秀作品の「Wくん」がすぐれていました。とくに、「しょうぎマン」さんは「ようし、

ケーキをつくらうか」という会話文から物語がスタートするというつくりかたがとてもよかったです。この物語の「蛇足」になるところは、いろいろ考えられそうですが、お父さんがレストランを予約してしまったのが一番の「蛇足」だったのかなと私は考えました。

一方、「Wくん」さんはとてもわかりやすい「蛇足」の話をつくってくれましたね。わかりやすいだけでなく、「おにごっこのおにが、よけいに二度タッチしたことによって、ふたたび自分がおににならなければならなくなった」という、なかなか思いつかなさそうな、ありきたりではない「蛇足」でもあったのがよかったです。

そして、佳作の「ゆっぴん」さんは、架空の歴史物語という壮大な舞台をもうけて見事に「蛇足」の物語をつくってくれま

した。特に、二人の武将同士が一騎打ちをする場面の迫力は目

うれしく思います。みなさん、おつかれさまでした！

を見はるものがありました。また、戦に勝った方の武士の笑い

(山分大史)

方が独特でしたが、この笑い方によってその人柄が手に取るように分かるように思いました。これも技ありだと思えます。

さて、中学～高校生の部は、そもそもみなさんにあまりなじみのない「赤穂事件」という歴史上のできごとが題材になっていたこともあり、かなりむずかしいテーマだったと思います。

実際に、最終的に原稿を締め切りまでに出してくれたのは二人のみとなりました。取り組んでくれただけでも、あるいは出してくれただけでも、本当に素晴らしいことでした。二人ともよいところがしっかりとある文章であり、このような文章を書けたことに胸をはってほしいと思います。

今回もすばらしい作品をみなさんが手がけてくれたことを